

アルコール依存症の再発予防薬について

アルコール依存症は、日本では主に世界保健機関 (WHO) の国際疾病分類 (ICD-10) の診断基準を基に、「飲酒への渴望、飲酒行動コントロール喪失、離脱症状、耐性の増大、飲酒中心の生活、有害な使用に対する抑制の喪失」の6項目のうち、過去1年間に3項目以上が同時に1カ月以上続いたか、または繰り返し出現した場合に診断されます。アルコール依存症の治療は断酒の達成とその継続が原則ですが、すぐに飲酒をやめることができない場合は飲酒量を減らすことから始め、飲酒による害をできるだけ減らす“ハームリダクション”の概念が近年提唱されており、飲酒量の低減を目標とした治療が世界的に広まっています。

治療の主体は心理社会的治療であり、薬物治療は補助的な役割を担います。薬物治療は解毒治療と再発予防に分類され、解毒治療では第一選択薬としてジアゼパム等のベンゾジアゼピン系薬の使用が推奨されます。再発予防における薬物治療は、治療目標が断酒の場合と飲酒量低減の場合で異なります。治療目標が断酒の場合に推奨される薬物療法は、第一選択薬がアカンプロサート (商品名：レグテクト®) で、ジスルフィラム (商品名：ノックピン®) やシアナミド (商品名：シアナマイド) は断酒への動機づけがある患者に使用する第二選択薬です。ジスルフィラムとシアナミドはアルデヒド脱水素酵素を阻害するので、服用中に飲酒した場合、血中アセトアルデヒド濃度が上昇し、顔面紅潮、熱感、頭痛、悪心・嘔吐等の不快な反応を引き起こします。使用に際しては、その作用機序や副作用について十分に患者に説明する必要があります。シアナミドは肝障害を引き起こしやすいので、肝機能をモニターしながら使用する必要があります。ジスルフィラムとシアナミドは作用機序が同じですが、作用発現時間と持続時間が異なり、シアナミドの方がジスルフィラムに比べ効果発現は早いですが、半減期が短く作用時間は短いです。アカンプロサートは腎排泄型の薬剤であるため、重篤な肝機能障害のある患者が禁忌となっておらず、肝障害のある患者にも使用しやすいと考えられます。治療目標が飲酒量低減の場合は、治療薬物としてナルメフェン (商品名：セリンクロ®) を考慮します。ナルメフェンはアルコール依存患者における飲酒量低減を効能・効果とした薬物であり、国内では2019年に上市されました。

今回は、国内で使用可能なアルコール依存症の再発予防薬について表にまとめました。参考にいただければ幸いです。

	抗 酒 薬		断酒補助薬	飲酒量低減薬
販 売 名 (一般名)	シアナマイド内用液1% (シアナミド)	ノックピン®原末 (ジスルフィラム)	レグテクト®錠333mg (アカンプロサートカルシウム)	セリンクロ®錠10mg (ナルメフェン塩酸塩水和物)
効果・効能	慢性アルコール中毒 及び過飲酒者に対する 抗酒療法	慢性アルコール中毒 に対する抗酒療法	アルコール依存症患者にお ける断酒維持の補助	アルコール依存症患者にお ける飲酒量の低減
作用機序	肝臓中のアルデヒド脱水素酵素阻害		エタノール依存で亢進した グルタミン酸作動性神経活 動を抑制	μ及び オピオイド受容体 拮抗薬, オピオイド受容 体部分的作動薬
用法・用量	断酒療法：シアナミ ドとして、通常1日50 ～200mgを1～2回に 分割経口投与。 節酒療法：通常シア ナミドとして15～60 mgを1日1回経口投与。 ()	通常、1日0.1～0.5g を1～3回に分割経口 投与。維持量として は、通常0.1～0.2g で毎日続けるか、あ るいは1週毎に1週間 の休薬期間を設ける。 ()	通常、成人にはアカンプロ サートカルシウムとして 666mgを1日3回食後に経口 投与。	通常、成人にはナルメフェ ン塩酸塩として1日1回10mg を飲酒の1～2時間前に経口 投与。症状により適宜増量 できるが、1日量は20mgを 超えないこと。
併用禁忌	アルコールを含む医 薬品	アルコールを含む医 薬品、食品、化粧品	なし	オピオイド系薬剤（緊急時 の使用を除く）
禁 忌	重篤な心・肝・腎障 害・呼吸器疾患のある 患者、アルコール を含む医薬品を投与 中の患者、妊婦又は 妊娠している可能性 のある婦人	重篤な心・肝・腎障 害・呼吸器疾患のある 患者、アルコール を含む医薬品を投与 中の患者、妊婦又は 妊娠している可能性 のある婦人	本剤の成分に対し過敏症の 既往歴のある患者、重度の 腎機能障害のある患者	本剤の成分に対し過敏症の 既往歴のある患者、オピオ イド系薬剤を投与中又は投 与中止後1週間以内の患者、 オピオイドの依存症又は離 脱の急性症状がある患者
販売開始	1963年4月	1983年3月	2013年5月	2019年3月

() 添付文書から一部抜粋。詳細は添付文書をご覧ください。

参考文献：各社添付文書・インタビューフォーム、新アルコール・薬物使用障害の診断治療
ガイドラインに基づいたアルコール依存症の診断治療の手引き【第1版】

(鹿児島市医師会病院薬剤部 田口 茉莉)